

Title	「大全早引節用集」「大全早字引」
Sub Title	Daizen Hayabiki Setsuyoshu, Daizen Hayajibiki
Author	関場, 武(Sekiba, Takeshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1989
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.54, (1989. 3) ,p.437- 492
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	村松暎, 藤田祐賢両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00540001-0437">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00540001-0437</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 「大全早引節用集」「大全早字引」

関場 武

本稿は、江戸～明治にかけて盛んに刊行された節用集類のうち、天明八年に初版が出てそれなりに版刷を重ね、他の節用集の編輯・開版にも影響を及ぼした「大全早引節用集」を取りあげ、その諸本と「大全早字引節用集」等の影響作について調査したものである。藤田・村松両先生には「節<sub>ノ</sub>用<sub>ヲ</sub>愛<sub>ス</sub>人<sub>ヲ</sub>」の精神を御習いしたような気がするが、本稿は用<sub>ヲ</sub>節<sub>ス</sub>どころか徒に冗長なものとなってしまう。何卒御寛恕いたゞきたい。なお、図書閲覧に際し御世話たまわった公私の文庫・図書館の方々に、深甚の謝意を捧げる次第である。諸本の比較は、異なる場合のみ掲出し、字句の異動等は繁雑となることを恐れ、主要な個所をのぞき殆ど省略に従った。

## 一、早引節用集

文安元（一四四四）年成立の「下学集」以降、その語彙を取り入れつつ、室町時代中期の文明から延徳・明応三年（一四六九～九四）頃にかけて成った節用集は、暫く写本のかたちで行われていたが、天正十八（二五九〇）年に泉州堺版が、次いで文禄（一五九二～九五）頃にいわゆる饅頭屋本が出版される。そして続いて慶長二（一五九七）年、易林本

が出版されると、イの部の最初、乾坤門が「乾イナキ 雷イカツチ公」に始まるこの乾本系統の節用集は、近世初頭の印刷文化興隆の波に乗って、元和・寛永・寛文と版を重ね急速な浸透ぶりを見せて行く。そもそも節用集は、古語を含む日用の国語語彙をイロハ順に配列すると共に、その内部を天地（乾坤）・時節以下の部門に分類し、求める語の漢字表記を示し時に簡

易林本・巻頭



乾坤イナキ 乾イナキ 雷イカツチ 公イナキ 雷イカツチ 電イナキ 霹イナキ 靨イナキ 稻イナキ 光イナキ 稻イナキ 妻イナキ 夷イナキ 則イナキ 月イナキ  
 巖イナキ 倉イナキ 稻イナキ 荷イナキ 伊イナキ 羅イナキ 胡イナキ 崎イナキ 五イナキ 百イナキ 川イナキ 石イナキ 上イナキ  
 巖イナキ 鳥イナキ 石イナキ 清イナキ 水イナキ 妙イナキ 美イナキ 井イナキ 射イナキ 場イナキ 的イナキ 石イナキ 橋イナキ 登イナキ 石イナキ 瓦イナキ  
 板イナキ 橋イナキ 石イナキ 近イナキ 瑞イナキ 籬イナキ 温イナキ 泉イナキ 板イナキ 敷イナキ 狗イナキ 防イナキ 一イナキ 口イナキ 山イナキ 城イナキ  
 巖イナキ 窟イナキ 巖イナキ 通イナキ 作イナキ 池イナキ 沙イナキ 礪イナキ 礎イナキ 碩イナキ 泉イナキ 愁イナキ 梵イナキ 家イナキ  
 宅イナキ 舍イナキ 屋イナキ 菴イナキ 庵イナキ 廬イナキ 莞イナキ 屋イナキ 棟イナキ

遣り取りといった日常の文字生活上の必要もあって、それが行草体の平仮名・漢字対照の形に書き直され、所謂草書本

単な注を付すといった組織を有するの  
 であるが、その簡便さも手伝って、江戸  
 時代は勿論、明治の半ば過ぎまで、辞書  
 の代表として盛んに刊行され利用され  
 て行くのである。その中には、本体は旧  
 版のものを殆どそのまま流用し、新た  
 に加えた付録で釣るといった手合のもの  
 も少なからずあるが、一方、様式や収  
 録語彙の面で工夫を試みた例もある。  
 今、形式の面から見ると、例えば、易  
 林本の見出し項目には片仮名表記の和  
 語に対応する漢字が真、すなわち楷書  
 体で示されているのであるが、書状の



寛文元年版 真草二行節用集・巻頭

が誕生する。そうなるとまた元の楷書体がわからないといった事態も起こり、楷書体を検索したい向きには不便なので、今度は、行草体の見出し字の左脇に真字体のそれを併出する方式が考え出される。これがいわゆる二体節用とか二行節用、真草二行節用集等と称されるもので、書名は単に「節用集」とあるだけだがそれと同じ形式を採るものが、まず慶長十六（一六一一）年に刊行され、次いで「二体節用集」を名乗るものが寛永三（一六二六）年、「真草二行節用集」が寛永十五（一六三八）年、「真草二体節用集」が慶安四（一六五二）年、「二行節用集」が寛文十（一六七〇）年に、と言った具合に各々刊行され、版を重ねて行く。また、「節用」という題号が「論語」学而篇の「節用愛人」に基づくとする解説をはじめ、収載語彙の若干について簡単な頭注を付した「頭書増補二行節用集」が、寛文十年の山本義兵衛版以降次々と出され、更に、行草体の見出し項目の脇に併記された真字体の漢字に対しても音又は訓を示す、つまり両方に音や訓が点ぜられているという事で「両点」を謳う「増補頭書二行節用集」が、延宝九（一六八一）年には出ている。そしてまた、見出し語の分類・配列に際し、通行の節用集とは逆に、部門別けの意義分類の方をイロハ分けに優先させた「合類節用



集」が、延宝四（一六七六）年に成立、同八年に出版される、といった具合に、使い易き便利さを狙っての創意工夫がなされていくのである。その流れの中で、宝暦年間のはじめに登場し、以後の節用集や事典・名彙類の検索方法と組織に多大の影響を与えたのが「早引節用集」である。

早引節用。これは、合類節用は当然のこと、イロハ分けを第一分類基準とする普通の節用集に於ても、語彙の配列にあたって乾坤、時節、官位、神祇、人倫といった部門が立てられており、各々の語の有つ意義による分類ということが重要な基準となっているわけであるが、その結果として、検索したい語の属する部門がどれであることを予め知っているか又は見当がついていないと、探し出すのに手間暇がかかるということに屢々なるのである。そこでその引きにくさを解消し、短時間で手早く探し当てることのできるようにしようと、部門分けの代わりに音節数（仮名数）によって検索する方式を考案し採用したものが早引節用集なのである。例えば筆者の見ることの出来た一番古い早引節用集は、宝暦

宝暦  
新撰 早引節用集・巻頭（部分）

二（一七五二）年初冬、江戸 西

宝暦  
新撰 早引節用集

村源六、大坂 渋川與市・村上伊

兵衛刊の「宝暦早引節用集」である

① 位 侯 志 威 胆 苗 言 云 謂 結

出入 居 業 教 天 揚 編 村 矢 断 与 湯 の 色 息 堤

が、同書では「壬申（＝宝暦一年）  
之秋」の據梧散人の漢文体の序文  
に続いて、次の様に述べている。  
すなわち、まずその「凡例」で

一、世二有ルトコロノ節用

八、乾坤門・言語門等ノ部分十三門或ヒ八十五門ニヨリテ字ヲ搜ル、然レ凡部門繁キニヨリテ却テ混雜ノ事多シ

H 3 嘉永七年新版・巻頭（部分）

# 大金早引節用集



位イ位イ伊イ意イ猪イ膽イ已イ  
位位イ位イ伊イ意イ猪イ膽イ已イ  
位位イ伊イ意イ猪イ膽イ已イ

威イ夷イ藺イ夷イ胃イ增イ以イ謂イ易イ為イ  
威夷イ藺イ夷イ胃イ增イ以イ謂イ易イ為イ  
威夷イ藺イ夷イ胃イ增イ以イ謂イ易イ為イ

異イ射イ居イ井イ辰イ厨イ遠イ忌イ  
異射イ居イ井イ辰イ厨イ遠イ忌イ  
異射イ居イ井イ辰イ厨イ遠イ忌イ

一、此節用ハ部門ニヨラズ、訓讀ノ假名ノ數ヲ以テ文字ヲ求ム、急時ノ便ナル他ニ異ナリ

云々と、部門分けの迂遠さを指摘し仮名数による検索方式の便利さを謳い、次いで「文字引様」と題して

- 一い 伊。意。猪。訓讀一声の分此部に入
- 二い 池。色。伊勢。二声の分此部に入
- 祝。医者。煎海茸。三声の分此部入
- 四ろ 論談。六波羅。四声の分此部入

餘ハ之に准ヘ訓讀の数を以テくり出す

と、その新しい検索の仕方を実例をあげて説明している。

この早引節用集は、ひとたび世に出るや大いに迎えられることとなり、「増補改正」や

「増字百倍」を冠するもの等が次々と板行されて行くことになる。例えば宝暦十(一七六〇)年初刊、明和六(一七六九)年孟春再版の「増字百倍早引節用集」二ツ切横本一冊は、その凡例で、やはり部門分けの引きにくさ、仮名数引きの迅速さを説いて

シカラシムルモノハ。門部混雑ノ惑ナクシテ。急時搜索キウジツソウサクノ便ナラシメント欲シテナリ。依レ之題シテ。早引節用集ト云ヨラシクイフ

と、や、ぎこちない表現ながら、早く引けるといふことが「早引節用集」の命名の由来であることを述べ、  
今新イマアラタニス數千字ヲ増益シソウエキ。傍真字ヲ附シテ。以テ日用ノ辨ニソナフカタハラシジ

と、語彙の大幅な増補と、早引節用に二行節用集の形式を導入して「真草早引」にしたことを謳っている。その形式はまた、明治期の各種の「いろは字引」や、大正・昭和初期の「いろは字典」にまで受け継がれ

原本早引節用集中の陳腐卑陋の俗語を省きて、廣く維新公用の熟字を撰ミ(明治十三年刊「開化大全早引節用集」)  
當今専用の字音、漢語、洋語等を採用、無用のものを省き(明治三十一年刊「新選帝國いろは字引」)

等と、当時流行の漢語や訳語・新語を多少取り込むかたちで連綿と続いて行くのである。これからこゝで取り上げようとしている「大全早引節用集」も、真草早引形式を採る早引節用のその一本である。

## 二 「大全早引節用集」

「大全早引節用集」には諸版がある。本書は嘉永七(一八五四)年版の奥付によって、天明八(一七八八)年の原刻であることが判明し、さらに万延版や明治版の刊記から、寛政八(一七九六)年の二刻本、文化二(一八〇五)年の三

刻本以下、文化八（一八一）年四刻、文化十（一八一三）年五刻、文政元（二八一八）年六刻、文政十（一八二七）年七刻、天保三（一八三二）年八刻、天保八（一八三七）年九刻、天保十四（一八四三）年十刻、安政元（嘉永七）年十一刻本等を経て、万延元（一八六〇）年十二刻、明治五（一八七二）年十三刻、同十三（一八八〇）年十四刻本に至る諸本のあったことが知られる。但し、それらの中には、実際に存在するものと刊年が異なるものもあり、筆者はそのすべてを確認したわけではない。例えば、天明八年の原刻本、寛政八年の二刻本は未見である。また文政元年版、天保八年版も未見である。ただ文政元年版は、その前年に当る文化十四年十一月の版があるから、それを文政元年正月の発兌と見て「文政元成寛政六刻」としているのかもしれない。また天保八年版であるが、これもその前年の「天保七丙申歳十二月吉旦」の刊記を有するものが存在するから、それを翌年正月の賣出しと見て「天保八丁酉歳九刻」とした可能性がある。但し「<sup>享保</sup>以後大阪出版書籍目録」には、天保八年二月五日付の「再板發行申出」の記事が載っているから、万延版、明治版の奥付に言う天保八年の九刻本は、実際に存在するのかもしれない。いずれにせよ、今は取りあえず管見に入った諸本について記して行くことにする。

### （A1）文化二年版

横本 二ツ切 一冊

早引節用集の書型は、「<sup>明和</sup>新編早引大節用集」（明和八年七月刊 大本一冊）を除くと、二ツ切か三ツ切本で、横本が多い。「大全早引節用集」の場合も、文化二年三刻本以下明治十三年版に至るまで全て二ツ切横本である。また文政十年版、天保三年版、嘉永七年版等には、薄葉刷本がある。

表紙 縹色地紙に紗綾形模様空押し。 竪一・二・六、横一八・二纏。

題簽 管見に入ったものは剝落のため未詳。

前見返し イロハ分けの丁付合文。宝珠等の模様入りの匡郭内に八行六段の枠を作り、いゝすのイロハと、左方に初  
丁三百廿五までのイロハの各はじまりの丁の丁付を記す。

扉題 宝珠等の模様入りの枠内に右から大きく「大全早引節用集 文化乙」と書名および刊年を出す。この様式は以  
後の版に踏襲される。また模様入りの匡郭も、前出のイロハ分け丁付合文や、凡例、付録、刊記等に共通である。



文化2年版・刊記

凡例 扉ウラに漢字片仮名まじり文。次いで「文字引集」と題し、実例を示しての檢索法の説明と「付録」の目録がある。

内題 大全早引節用集。

版心 巻頭凡例部分や巻末付録部分は白口。下方に界線を置き、その下に丁付(但し付録「三百三十二」には界線無し)。本文部分は、上方に「大全」の題名と、その下左に小さくイロハ分け表示。下方に界線を置いて丁付。

丁付 (巻頭) 序一、序二 (本文) 一〜三百三十二 (付録) 三百三十二〜三百三十八

丁数 前見返し+(凡例)二十(本文)三三一+(付録)七十奥付。 行  
数 (本文) 有界七行、二体。 字数 一行約十〜十二字。

匡郭 本文は単辺、他はすべて宝珠、珊瑚等の模様入り飾り枠。 竪一〇・二

五、横一五・二纏。

刊記 後表紙見返しに貼付。飾り粹付。右方に界線を置いて三点の節用の内容案内、左に刊行年月と江戸・大阪の書肆四軒を出す。

安見節用集

此節用集ハ二字め  
のかなを又いろは分ニす

二字引節用集

よみこへの上下のかな  
にて引く書なり

五音引節用集

あいうゑをの五音  
のかなニより引書也

文化二乙 丑歳二月吉旦

江戸本石町二丁目

西村源六

同 日本橋通二丁目

山崎金兵衛

大坂心齋橋安堂寺町

村上伊兵衛

同 順慶町心齋橋東へ入

柏原屋與左衛門

「文化二乙 丑歳二」の部分は、あるいは入木か。

備考 右の奥付に見える三種の節用集の広告は、(G)天保十四年迄の各版にもあるが、実際に刊行されたかどうかは不明。但し、「二字めのかなを又いろは分ニす」という「安見節用集」と同じ配列方式を採る節用集としては、「和蘭

陀の例に習ひ字をつらぬ」という「蘭例節用集」（文化十二年刊）や、「以呂波四十七字ノ下亦四十七字ヲ列シ、二重ニシテ、求ルニ從ツテ得易カラシム」ことを狙った「節用早見二重引」（嘉永五年刊）、「早字二重鑑」（題簽・見返し「真草早引二重鑑」）（嘉永六年刊）がある。

また、「よみこへの上下のかなにて引く書」という「二字引節用集」と同じ検索方式を採用のものとしては、節用集ではなく連歌俳諧用語辞典であるが、中堀僖庵の「しをり萩詞林綱目（外題「萩のしおり」）」（元禄五へ一六九二）年八月刊）がある。同書の後印に享保三（一七一八）年版、再版本に天明四（一七八四）年版、同求板本に明治十六（一八八三）年版があるが、享保版・天明版とも奥付の版元の最後に大阪の「順慶町心齋橋筋柏原屋清右衛門」が顔を出しており、「大全早引節用集」の主要版元で同系列の柏原屋與左衛門が、「萩のしをり」式の検索法による節用集を考えつき、売り出しを図ろうとしたのかもしれない。或いは、同じ大阪の吉文字屋市兵衛周辺から考案・発売された「すむ」、「にごる」（「清、濁」、「ひく」（「語末が「う」「ふ」で終るもの、語の途中に長音を伴うもの）、「はねる」（「語末が「ん」で終るもの、途中に「ん」の字を含むもの）という独特の四分類と部門別けとを用する「連城節用夜光珠」（穂積義雄撰、明和五年刊）や「（字探）連城大節用集夜光珠」（明和六年刊）、「急用合即坐（捷経）」（安永七年刊。寛政六年、天明六年版もあり）、「大成正字通」（天明二年刊）といった一連の節用類に刺激を受け、吉文字屋との対抗意識も手伝ってその発売が予告され続けたのかもしれない。

なお、「あいいうゑをの五音のかなより引」という「五音引節用集」については未詳。これももし五十音引を意味しているのだとすると、刊行された節用集で五十音引を採用ものは明治九年版の「開明節用集」まで待たねばならない。

ところで本書には、前に記したように、扉ウから次の丁にかけて、「凡例」と「文字引様」、それに付録の目録がある。本書の成立にも関わってくる個所なので、次にそれを紹介することとする。

凡例

一、此書ノ引ヤウハ、門部ニ就テ求メズ、音訓ノ假名數ニ随テ文字ヲ得ル、其例次ニ舉タリ  
 一、原板早引節用集、世ニ行ハレテ尚増補ノ集アリ、然ルミ、今、人家日用ノ俗語及ビ經史尺牘ノ熟字ニ至ルマテ、出所慥ナルヲ撰テ、音訓ヲ正シテ廣大増益ス、於是雅俗要用ノ文字ヲ不洩シテ、索閱ノ捷キ、海内此書ヨリ便ナルナカラノミ」(序1ウ)

文字引様

一い 威・位・異・居・井・一 聲の分  
 二い 今・家・岩・伊・豫・二 聲の分  
 三い 祝・委・細・色・香・三 聲の分  
 四い 慇・懃・家・土・産・四 聲の分  
 五い 巖・嶋・妹・背・山・五 聲の分  
 餘ハこれに准ヘ、よミこヘの數をもつてくり出すべし」(序2オ)

音かなづかひの取ちがひやすき字、大畧をしるす

光 くハウ かう こう 香 かう こう 蠟燭 らうそく ろうそく

相續 さうぞく そうぞく 簞 ほうき ほうき 石榴 ざくろ じやくろ 此類ハ両

方を見るべし

この「凡例」と「文字引様」は、前に紹介した「新撰早引節用集」のそれに始まるが、「大全早引節用集」の場合には、「増補早引節用集」に拠っている。すなわち、まず、「増補早引節用集」(タテ三ツ切五行本。宝曆七年、明和五



年版等あり)が宝曆二年の「宝曆新撰早引節用集」を享けつゝも、「文字引様」いノ三の「いしや医者」を「いとく威徳」に代え、次が宝曆新撰では「いノ四」でなく「ろノ四」として「ろんだん論談。六波羅。」とあつたのを、「いノ四」として「いんじゆ員数。十六夜」の二例に直し、更に宝曆新撰版には無かつた

又、頭字よミこへ取速やすき字もおほし、大畧をしるす  
という一文を加えて

光 くハう かう こう 香 かう こう

蠟燭 らふそく ろうそく 相續 さうそく そうぞく 此類ハ両方を見るべし

という実例を示したのであるが、「百倍早引節用集」は更にそれに手直しを加え、いノ一〜四であつたそれを「いノ五」までに広げ、「いノ一」はそのままにして他の仮名数の例示語を

一 い伊・い意・い猪・い膽 三 い衣服・い吳風 四 い陰陽・い色品

に入れ替え、「い一谷・い幼稚」を追加し、また、光く相續までの四語であつた「頭字よミこへ取速やすき字」も、「こへ音かなづかひの取速やすき字」としてその後

箒 ほうき はうき 石榴 ざくろ じやくろ

の二語を増補している。この一〜五までの仮名数の出し方と、仮名遣を取違えやすい語の表示例から、本書は、「百倍早引節用集」のそれを参考にしていてと考えられるのである。

(A2) 文化二年版・後印 河内屋版

扉・内題・版心・丁数等 A1本に同じ。但し刷り劣る。

刊記 様式はA1本に同じ。右側にある安見、二字引、五音引の三節用の広告の部分と匡郭を残して、他を改刻。

文化二乙丑歳二月吉旦

江戸日本橋通十軒店

西村 源 六

全 日本橋通三丁目

山 崎 金兵衛

大坂心齋橋通唐物町南へ入

河内屋 太 助

全 堺筋安土町南へ入

萬 屋 安兵衛

全 順慶町五丁目

柏原屋與左衛門

すなわちA1本の四書肆のうち、大阪の村上伊兵衛が抜け、河内屋太助と萬屋安兵衛が入っている。また他の三軒も住所が異っている。

本文末付録の最後の丁と奥付との間に「藏板目録

大坂心齋橋通唐物町

河内屋太助」一丁分があり、「武用辨畧」一萬

手形案文」の二十六点の内容紹介付広告を載せる。この部分の刷りは良くない。右の広告中、本書の発売時期を

推定することが出来る書物としては、「算学指南大全」がある。「師匠いらす、世に算法の書数品有といへども、

文化二年版後印 河内屋版・刊記

安見節用集

安見節用集、二巻あり  
の巻をみるは必ず

二字引節用集

よみるの上にあま  
にくく書なり

五音引節用集

あいうえをのふが  
のいさより引集

文化二乙丑歳二月吉且

江戸日本橋通十軒店

西村源 六

全日本橋通三丁目

山崎金兵衛

大坂心齋橋通津物町南入

河内屋太助

全堺筋安土町南入

萬屋安兵衛

全順慶町五日

拍原屋與左衛門

術ごとを顕す事なし、此本ハ其秘密術を委く平かなにあらハし、誠に近道の書なり」と宣伝される同書は、松岡良助の著。「算学稽古大全」と同一の書とも言われ、とすると「以後大阪出版書籍目録」に、板元・河内屋太助、出願・文化三年九月、許可・文化四年三月十三日として出ているそれということになり、文化五年版や天保四年、嘉永二年版等がある。また広告通りの「算学指南大全」ということであれば、これも前引の目録の文化五年六月出願の条に板元・河内屋太助の名で増補版の記事が出ており、「本書の板行に就き、一旦出願したるも、都合ありて願ひを取消す」由の「附記」が記されている。いずれにしても、文化四、五年より遡ることが出来ないわけで、そうするとこのA2本の発売もそれ以降、文化八年くらい迄の間ということになる。なお他の書物も寛政、享和、文化元年頃の初版が多いが、「唐明詠物詩類函」の第二集が文化八年、「武用辨畧」の増補発行願出が板元・河内屋太助より文化十年二月になされ、同年七月に許可、同年刊、それに文化九年版もあるから、A2本の発売時期も或は文化八、十年あたりまで引き下げるべきであるのかもしれない。

(B) 文化八年版

未見。但し (J) 明治五年版の扉の書名の脇、左下に「文化辛未監定」とあるから、あるいは文化辛未〳〵八年版は実在するのかもしれない。

(C1) 文化十四年版

表紙 濃縹色地紙に雷紋、唐草模様空押し。

扉題 「大全早／引節用／集」の題の左下に「文化丁／丑監定」とある。凡例 A本に同じだが、A本六行目で「然ルニ」とあつた誤りを、本書では正しく「然ルニ」としている。

刊記 様式はA本に同じ。右側に安見、二字引、五音引の三節用集の広告があり、界線を置いて左に  
文化十四丁丑歳十一月吉旦

江戸日本橋通南一丁目

須原屋茂兵衛

大阪心齋橋通唐物町南<sub>エ</sub>入

河内屋太 助

全 堺筋安土町南<sub>エ</sub>入

萬 屋安兵衛

全 順慶町五丁目

柏原屋與左衛門

とある。即ちA2本に在った江戸の二書肆の代わりに、須原屋茂兵衛が入っている。以後嘉永版に至るまで、本書に名を列ねる江戸の書肆は須原屋だけになる。

備考

本文はA本と比べると、清濁表記のちがいのほか、少異がある。主なものをあげると(前がA本、後が本書。へく内は真草二行のうち左脇に掲出の片カナ・真字体の本文)

六一七オ・2〜3行目〈言外〉<sup>コトズハイ</sup>——〈外〉<sup>グハイ</sup>——〈言妨〉<sup>ゲンハウ</sup>——〈妨〉<sup>ハウ</sup> 五五〇ウ・2〜3行目(以下「行目」略

す) 法花經<sup>ほけきやう</sup>〈花經<sup>はなけい</sup>〉・法花宗<sup>ほけけしう</sup>——法華經<sup>ほけきやう</sup>〈華經<sup>くわけい</sup>〉・法華宗<sup>ほけけしう</sup> 五七五オ・7 聽庭<sup>ちやうてい</sup>〈底<sup>てい</sup>〉——聽庭<sup>ちやうてい</sup>〈庭<sup>てい</sup>〉

そ一四九オ・1 副足<sup>そくあし</sup> 鞠<sup>ま</sup>——副足<sup>そくあし</sup> 鞠<sup>ま</sup>にいふ 三一七八オ・1〜2 無不愈<sup>むふゆ</sup>——無不愈<sup>むふゆ</sup> 六二四〇ウ・2

〈憫<sup>シン</sup>〉——〈憫<sup>オウ</sup>〉 二四一オ・1 股肱<sup>こかうのしん</sup>臣<sup>しん</sup>〈股肱<sup>モ、カウツカフル</sup>臣<sup>しん</sup>〉——股肱<sup>こかうのしん</sup>臣<sup>しん</sup>〈股肱<sup>モ、カウツカフル</sup>臣<sup>しん</sup>〉 四一九三ウ・3 深恩<sup>じんをん</sup>

深厚<sup>じんかう</sup>——深恩<sup>じんをん</sup>・深厚<sup>じんかう</sup>。

等である。

(C2) 文化十四年 吉納屋版

扉題・凡例等 C1本と同じ。

刊記 C1本の三番目にあつた萬屋に代わつて「全 南久太良町中橋西エ入／吉納屋善十郎」が入木されている。

備考 刷りC1本より劣る。

(D) 文政十年版

扉題 A、C本と同様式。「大全早／引節用／集」の題の左下に「文政十／夷監定」と記す。

凡例 A、C本と同様式。但し二行目「就<sup>ヨク</sup>テ」はA本のまま。

刊記 A、C本と同じく右方に安見、二字引、五音引の三節用集の案内広告があり、界線を置いて左に

文政十丁亥歲二月吉旦

の年記、一行あけて左に江戸の須原屋茂兵衛と大阪の河内屋太助、同じく吉納屋善十郎、柏原屋與左衛門の住所と名前を出す。すなわちC2本と書肆は全く同じである。

備考 薄葉刷りもあり。本文はC本とほぼ同じだが、少異がある。(前者がC文化十四年版、後出が本書)。六一七オ・2

3 〈外<sup>グハイ</sup>〉——〈言外<sup>コトバグハイ</sup>〉——〈妨<sup>ハウ</sup>〉——〈言妨<sup>ゲンハウ</sup>〉——〈庭<sup>ニハ</sup>〉——〈庭<sup>ニハ</sup>〉——〈調<sup>チウ</sup>〉——〈調<sup>チウ</sup>〉

小三三二一ウ・6 〈兩<sup>アラウ</sup>〉——〈兩<sup>アラウ</sup>〉——等がそれである。また付録の「年代畧記」の最後「文政」の個所は、「文政

文化十五改」と墨釘になっている。

(E1) 天保三年版

扉題 A、D本と同じ様式。「大全早／引節用／集」と題名を大きく三行に出し、「集」の字の下方に「天保壬／辰監定」

と年記を示す。

凡例 二行目「就<sup>ヨク</sup>テ」の誤りはそのまゝ、受け継ぐが、六行目は「然<sup>シカ</sup>ルニ」と正しく直っている。

<p>安見節用集  <small>伏見利集の序          の巻をうらほす</small></p>	<p>二字引節用集  <small>よみその上下のま          にくしく書あり</small></p>	<p>五音引節用集  <small>あいうえをのそ者          のかきよう引きん</small></p>	<p>文政十丁支歳二月吉且</p>
<p>江戸日本橋通南壹丁目          須原屋茂兵衛</p>	<p>大阪心齋橋通唐物町東入          河内屋太助</p>	<p>全 南久太郎中搦西入          吉納屋善十郎</p>	<p>全 順慶町五丁目          柏原屋與左衛門</p>

文政10年版・刊記

刊記

A、D本と同じ様に、右側に三節用集の広告があり、界線を置

いて左に

天保三<sup>壬辰</sup>歳正月吉且

江戸日本橋通南壹丁目

須原屋茂兵衛

大阪心齋橋通唐物町

河内屋太助

全 心齋橋北詰

柏原屋源兵衛

全 天満天神鳥居筋十丁目西入

木 屋伊兵衛

全 順慶町五丁目

柏原屋與左衛門

とある。

備考

薄葉刷り本もある。既に見た如く、(A)文化二年版と(C)文化十四年版、(D)文政十四年版とは、本文に各々少異があつたが、この天保三年版は刊行に際し本文に若干手直しを加えたらしく、A、Dの諸本と大きく異なる個所が目につく。主な個所を掲げると次の通りである。(はじめがA本、後が天保三

年版、へゝ内は二行の中の左方の片カナ・真字体の部分。算用数字は行数

四一三才・7 沃懸いつか〈沃懸ヨウケン〉。——忠節いさとし〈忠節チュウセツ〉。三四〇ウ・7 卒尔ハカ 〈卒尔ソツジ〉。——阿膠あかひ〈阿膠アワウ〉。五五〇

ウ・2 3 法花ほけ〈花ハナ〉。經きやう。法花宗ほつけしやう。——法華ほな〈華ハナ〉。經きやう。法華宗ほつけしやう。四六一才・7 富尾とみ〈尾ビ〉。——豊臣とよとみ〈豊臣ホウジン〉

五七五才・7 廳庭ちやうてい〈底ニハ〉。——廳庭ちやうてい〈庭ハ〉。六七六ウ・7 千束文ちつかふみ。——千束文ちつかふみ。同七

七才・1 筑前橋ちくせんばし〈筑前橋ツクマヘキヤウ〉。——竹葉椒ちくようせう〈竹葉椒タケハシユク〉。とうがらし。七七七才・7 貞享曆ちやうきやうれき〈貞享曆テイケンタルコヨミ〉。——張

本人ほんにん〈張本人ハルモトヒト〉。同七七ウ・1 2 中宮太夫ちゆうぐうのたいふ〈太夫ヲノヲウト〉。竹葉椒ちくようせう〈竹葉椒タケハシユク〉。とうがらし。——長公主ちやうこうしゆ〈長公主ナガギキモスシ〉

天子姉妹てんししめい。六八一才・5 隆平橋りやうへいばし〈隆平橋サカシタヒラキヤウ〉。大坂堀江おさかほりえ。——琉球国りゅうきやうこく〈琉球国タマタマクニ〉。六九七才・6 燈明とうめい。——燈

明あかし。六二二四才・2 茵蔯からよもぎ〈茵蔯インチン〉。——賽かへりまふす〈賽サイ〉。同七。3 賽かへりまふす〈賽サイ〉。——上弦かみのゆみはり〈上弦シヤウゲン〉

四一四九才・1 副足鞠そくあし。——副足鞠そくあし。副足そくあし。四一五七才・4 腓つらすり〈腓カク〉。魚ノ腹いさなはら。——哨つそち〈哨セウ〉。三一六六才・1

〈承塵シヤウテン〉。——〈承塵シヤウテン〉。三一七八才・1 2 無不愈むふゆ。——無不愈むふゆ。六二四〇ウ・2 惆しん。——惆しん。同二

四一才・1 股肱臣こかうのしん〈股肱臣モウカウツカフル〉。——股肱臣こかうのしん〈股肱臣モウカウツカフル〉。四二九三ウ・3 深恩じんおん。深厚じんかう。——深恩じんおん。

深厚じんかう。教しゆ。三三一ウ・6 兩アタツ。——兩アタツ。

(E2) 天保三年 渋川清右衛門版

扉題・内題等 E1本に同じ。



# 大全早

## 引節用

### 集

天保壬辰  
監定

天保3年版・扉

刊記

E1本に同じ。但しその前に「攝都書林波川稱航堂藏版目錄／大阪心齋橋通順慶町／柏原屋清右衛門」と題する内容案内付広告が十二丁分入っている。この部分は丁付が各丁ウのノド側匡郭外下方に一〜十二まで付いており、「民間年中故事要言」一「巻懐韻鏡」の七十三点の広告が掲載されている。

(F) 天保七年版

扉題 天保三年版と同様式。「大全早／引節用／集天保丙申監定」。

凡例 振り仮名や清濁表記に僅かの差異はあるが、E本に同じ。

刊記 A〜Eの諸本と同じく、右方に三節用集の案内広告があり、界線を置いて左に刊行年月と書肆を列記する。すなわち「天保七丙申

歳十二月吉旦」の年記を出し、次いで左に江戸の須原屋茂兵衛

大阪の河内屋太助、敦賀屋九兵衛、木屋伊兵衛、柏原屋與左衛

門の五軒の書肆の所在地と名前を記す。すなわちE本の三番目

にあった柏原屋源兵衛が「全 心齋橋壹丁南 敦賀屋九兵衛」と

入れ替っている。

備考 管見に入ったものは刷りが良くない。本文はE本に近いが、少異もある。はじめにE天保三年版を出し、後に本

書をあげる。

宥見節用集

いそり集はこま  
のふたをうらはせり

三字引節用集

よみよみの上下のま  
にくりきり音なり

五音引節用集

あへうゑをのゑ音  
のゑもくろり音も

天保三壬辰歳正月吉日

江戸日本橋通南壹丁目

須原屋茂兵衛

大匠奔馬通唐物町

河内屋太助

△心舟橋北詰

拍原屋源兵衛

△天満天神鳥居筋十目西入

木屋伊兵衛

△順裏町五丁目

拍原屋與左衛門

天保3年版・刊記

五七五才・7 廳宣〈宣〉・廳庭〈庭〉。——廳宣〈宣〉。

廳庭〈庭〉。

か一二四才・2 鳳来紅。——鳳来紅。

四二六〇ウ・3 才幹〈幹〉。——才翰〈翰〉。 四三二〇

ウ・6 一涿。——一隊。 兵の

右のうち、廳宣、才翰などは、補刻風な直し方をしている。

(G) 天保十四年版

表紙 橙色地紙に唐鏡模様空押し。

題簽 諸本と同様式。飾り枠付短冊形紙、表紙左肩に貼付。「大全早引

節用集 眞字附。

扉題 A、F本と同様式。三行に分けて記した書名の末、左下方に「天

保癸／卯監定」とあり。 凡例 E本に同じ。

刊記 A以下の諸本と同じ様式。すなわち右に安見、二字引、五音引の三節用集の案内広告があり、界線を置いて左に「天保十四癸卯歳八月吉旦」の年記と五書肆の名と住所を列記する。この五名の書肆と住所は(F)天保七年版と全く同じである。

備考 本文は(D)文政十年版にほぼ同じ。

(H1) 嘉永七年版

表紙 濃縹色紙に雷紋、唐草模様空押し。竪二二・八、横一九・四。題簽 G本と同様式。

扉題 諸本と同様式。「大全早引節用集嘉永甲寅監定」。

凡例 二行目「就ヨリテ」、四行目「文字」、六行目「然シカルニ」と正しく直っている。

刊記 A、Gの各版の様式を模し、飾り枠内右方に界線で仕切って「早引」「いろは」大増補大全早引の三種の節用の広告を出し、また界線を置いて左に「嘉永七甲寅歳正月吉旦」の刊行年月と江戸・大阪の五書肆の所在地と名前を記す。この五書肆名と住所表示は、F、G両本と全く同じである。広告は「早引節用集 懷中本 全一冊」同真字付の

ろは節用集 此書ハ十三門部分ニシテ  
いろは假名ニテ引書也

全一冊 至大冊横本  
大増補  
音訓附  
嘉永  
新刊「早引節用集」

全一冊 至大冊横本  
薄葉摺師座印の三つである。

右の奥付の

広告中、はじめの「早引節用集」はどれを指すのか現物を特定出来ないでいる。二番目の「いろは節用集」は「十  
三部分ニしていろは假名ニテ引書也」というから、これだけだと合類節用の様なものをさして言っているのか通常

の節用集のことを言っているのか不明。

H 1 嘉永七年版・扉



但しこれが早引節用にして十三部分ということだとすると、擬うべきも

のがある。それは天保十三（一八四二）年五月刊の「十三門部分 音訓正誤 大全早字引

一名以呂波節用集」である。同書はその凡例で

近ころの字書とも、多くハかなの文字数のミにてわかち、門部な

きゆるゑ、混雑して、文字を求るに煩し、此書ハ音訓のかな数をわ

かち、その中の十三門部により文字を求る故、捷徑なり

と、早引方式の語彙検索法の限界と、十三門部分方式を併用することの

便利さを謳っている。前途の如く、イロハ分類と部門立て方式による語

彙検索の迂遠さから脱出するために、仮名数のみによって引く早引方式

が考案されたのであるが、それでも例えば毎半葉七行、一行約十一字詰

の「大全早引節用集」で、イの四が八丁五七〇語、ハの四が約六丁四三

一語もあるという状況で、その中から求める語を見出すのであるから、

常に「早引」という具合にはとても行かないのである。そこでまたこの

「十三門部分 大全早字引」のような、早引の中に部門分けを繰り入れる方式

が案出されたわけである。

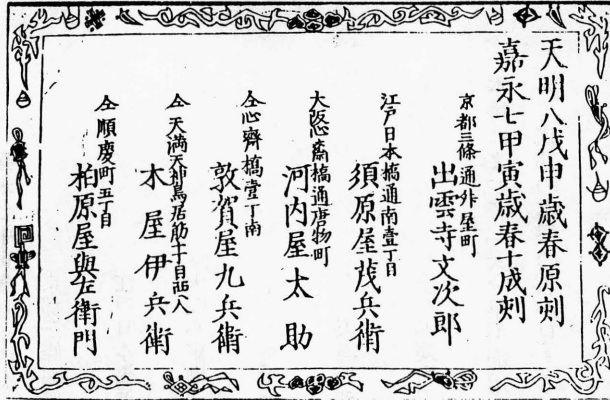
本書は中村國香編、文化十三（一八一六）年序刊の「十三門部分 音訓正誤いろは節用

<p>早引節用集 <small>懐中本</small> 全一冊  <small>同頁字林</small>          いはば節用集 <small>いはば士行勢多し いろは假名でしき</small> 全一冊</p>	<p>大増補 志嘉永          音訓 太章引節用集  <small>新刊</small> 全一冊  <small>至大冊横本</small>  <small>音訓</small></p>	<p>嘉永七甲寅歳正月吉且  <small>江戸日本橋通南壹丁目</small>          須原屋茂兵衛  <small>大坂心齋橋通唐物町</small>          河内屋太助  <small>合心齋橋壹丁目</small>          敦賀屋九兵衛  <small>合天橋 不和島 居島 十日市 品入</small>          木屋伊兵衛  <small>合順慶町五丁目</small>          柏原屋與左衛門</p>
---	---	---

H 1 嘉永7年版・刊記

集大成」の改題本で、外題は「求字いろは節用集大成」。その板行・賣弘めの経緯が「享保以後大阪出版書籍目録」の天保十一年十月の条に、また再板発行申出が同十三年三月の条に、柏原屋與左衛門の名を出して載っている。更に天保十三年のこの改題本の刊記には、江戸の須原屋茂兵衛と大阪の柏原屋與左衛門までの六軒の書肆があがっていて、H1本と異なるのは、尾州名古屋の永楽屋東四郎が一名多いという点だけである。それゆえ、H1本の広告に言う「いろは節用集」は、本書である可能性が強い。因に、本書の如く早引と部門立てとを併用する方式は、あまり広まらず、他には嘉永三年刊の「引萬代節用集」が目につく程度である。

三番目にある嘉永新刻、至大冊の「大増補音訓附大全早引節用集」とは、山下重政旧案、自在堂浅田觀三訂正、山本張堂再校、武田左馬介揮筆の「増補音訓大全早引節用集」のことであろう。同書は題簽題が広告と同じで、右下に「眞字附」とあり、弘化四（一八四七）年官許、嘉永四（一八五二）年春の開板。京都の勝村治右衛門、



江戸の須原屋茂兵衛、大阪の敦賀屋九兵衛、柏原屋與左衛門ら三都十一軒の版で、凡例・付録とも全五七六丁の厚冊である。内容は同書嘉永四年版付載の広告で

H 2 嘉永7年後修本・刊記

右の字引ハ、是迄有來の字引に洩たる文字を数万字増補し、世界に入用の文字ハいふニ及バズ、正しく諸經史の出所を吟味し、雅俗の熟字、名所旧迹、又ハ近來諸藝に達せし人物の字号、和漢ともニ多らミ出し、假名字の用ひ方は往古の例による、故ニ四民重宝無双の書也

と述べているように、原本の「大全早引節用集」を大增訂したものである。詳細は別稿に譲るが、安政頃の版や元治元（一八六四）年版、二冊に分冊したもの等がある。

備考 本文はG本に近いが、と六二オ・七 富永・豊臣、とよとみ 五七五オ・七 聴宣ちやうせん

〈宣〉、ひ三二〇ウ・6 一隊同 等、F本に近い個所もある。

(H 2) 嘉永七年・後修本

題簽・扉・凡例・内題等 H 1本に同じ。

刊記 飾り枠を含め改刻。

天明八戊申歳春原刻

嘉永七甲寅歳春十成刻

京都三條通舁屋町

出雲寺

文次郎

江戸日本橋通南壹丁目

須原屋

茂兵衛

大阪心齋橋通唐物町

河内屋

太助

全 心齋橋壹丁目南

敦賀屋

九兵衛

全 天満天神鳥居筋十丁目西<sup>へ</sup>入

木屋

伊兵衛

全 順慶町五丁目

柏原屋與左衛門

本書によって「大全早引節用集」は天明八年春の原刻であることが判明する。また書肆には出雲寺が加わり、初めて京都の本屋の名が見える。後印であるが、H1本に比して刷りが極度に悪いわけではない。

(H3) 嘉永七年・新刻本

表紙 濃縹色地紙に雷紋・唐草模様空押し。 縦一・二・六、横一九糎。

題簽 H1・H2本と同様式。「大全早引節用集<sup>真字附</sup>」。 縦一〇・一五、横三・二糎。

扉題・凡例・内題等 H1・H2本と同様式であるが、全て新刻。

版心 凡例や巻末付録部分は白口、本文部分は い 壹が基本。すなわちA以下の諸本にあった「大全」の

版心題が無く、イロハ分け標目も、第五三〇八、六五〇八、九一〇三、一〇三〇六、一二二〇二、一三二五〇六、

一四五〇八、一六九〇一七〇丁をのぞき皆オモテ側にある。また一二七〇八、二九七〇八はイロハ分け表示が無

い。

丁付 (凡例) 序一、序二、(本文) 壹、二〇三三三十一、(付録) 三百三十二〇三十八。

刊記 刊年月・書肆ともH2本に同じ。但し改刻。

備考 H2本とは異版。H2本と比較すると(はじめがH2、後出が本書

六一七オ・2〇3 言外〈外〉。言外〈言外〉。言妨〈妨〉。言妨〈言妨〉。7 〈堂々〉

―〈堂々〉。四六二オ・7 豊臣〈豊臣〉―富尾〈尾〉。五七五オ・7 臈庭〈庭〉―臈庭〈底〉

四一四八ウ・6 尊体。尊体〈体〉。6〇7 〈俗説〉―〈俗説〉7 〈嘱託〉―〈嘱託〉一

四九オ・1 副足鞠にいふ。副足鞠 三二七八オ・1〇2 無不愈―無不愈 六二四〇ウ・3 感。

―感。二四一オ・1 股肱臣〈股肱臣〉。股 臣〈股肱臣〉。

といった異同が目につく。その中\*印を付した箇所は(A)文化二年版の特徴を示しており、本書の本文はA本

に基き、多少の修訂を加えたものと言えよう。



(I) 万延元年版

表紙 黄色地紙に雲形模様空押し。縹色地紙に雷紋・唐草模様空押しのものもあり。

扉題 大全早／引節用／集萬延庚申監定。刷り悪し。凡例・内題等 日本に同じ。

丁付 序一、序二、一〜三百三十九 丁数 前見返し十(凡例)二十(本文)三三十一(付録)七・五十(奥付)

一・五丁。

丁付や丁数がA〜Hの諸本と異っているのは、付録の三三五ウ以下にある「年代畧記」が、三三八オの末で「嘉永七化五改」となっており、そのため三三八ウの右方にも梓を二行三段分作って「安政嘉永七年マテ」と二段分だけ記入し、後は空欄のまま界線を置いて左に

早引節用集小本巻懐形／増字早引節用集真字附横本一冊／數引節用集三ツ切横本一冊／同 真字附三ツ切懐中本一冊／いろは節用集大成／

大増補 音訓附 大全早引節用集大本／繪入本 各簿葉摺も御座ゆ

と七点分の節用集の広告を入れ、次に「三百三十九」の丁付のある丁を作って、オに「錢相庭わり」を記し、ウ以下に刊記を入れていることによる。

刊記 三三九ウに天明八年原刻〜萬延元年十二刻の刻記と版元三名、後見返しに三都十名の発行書肆を記す。

天明八 戊申 歳春原刻

寛政八 丙辰 歳二刻

文化二 乙丑 歳三刻



同 御幸町御池下ル

菱 屋孫兵衛

大阪心齋橋通北久宝寺町

河内屋源 七

同 安土町

河内屋和 助

同 南久宝寺町

伊丹屋善兵衛

同 北久宝寺町

敦賀屋彦 七

同 心齋橋通南一丁目

敦賀屋九兵衛

## 書

## 行

### 備考

「版木を洗ったような感じの所もあり、刷り悪く、辞書としての用をなさぬ個所が目につく。本によっては版木の割れ等も見受けられる。

本文はA本やH3本に近いが、少異もある。つ一五七オ・4の「綿つらなる」は、天保三年、七年版で「哨つぼ」は、

他の諸本は「腴つちやう」は「魚ノ腹カウ」とある所で、本書独自の異文である。

右の広告にある七点の節用集のうち、「數引節用集」の真字附、懷中本一冊とは、おそらく「懷數引節用集」のこ

とで、同書は天保十五（弘化元へ一八四四）年七月の新刻。嘉永三（一八五〇）年版や安政三（一八五六）年

版がある。嘉永版本によれば、版元は大坂の豊田卯左エ門・木屋伊兵衛・象牙屋治郎兵衛の三名で、これは本書

の版元と同じである。「發行書行（「數引」では「發行書房」）も「數引」は十二名で、本書の十名に比べ大阪の

河内屋茂兵衛・秋田屋太右エ門の二名が多く、また、京都の菱屋孫兵衛と大阪の柏原屋與左エ門が入れ替った

け。広告も五点で、本書「大全早引節用集」の萬延版にある「數引節用集」、「同真字附」の二点が無く、「早引大節用集」の代わりに「大全早引節用集真字附」が入っているだけである。したがって「懐寶數引節用集」と本書広告中のそれとが一致する可能性は濃いと見えよう。

また「いろは節用集大成」についてはH1本の刊記のところでもふれたが、文化十三年、天保十三年版の他に、安政五（一八五八）年版があり、版元は本書と全く同じ。「發行書行（「いろは」では「發行書房」）も同じ十名で、安政五年版の大阪の柏原屋與右エ門に代って、本書には京都の菱屋孫兵衛が入っているだけであるから、この広告に言う「いろは節用集大成」は、安政五年版のそれを指していると考えて間違いないであろう。もう一つの繪入り大本であるという「早引大節用集」であるが、その条件に合うものは明和八（一七七二）年の「新編早引大節用集」しかない。しかし版元はI本と異なっており、後印本も目録してはいたので特定できない。

なお、国会図書館亀田文庫には、本書の改装本がある（薄葉刷り）。扉・凡例とも文政十年版のものを流用し、本文も、匡郭の切れ等、文政十年版に一致する。刊記は三三九ウのものしか無く、後見返しは後補白紙。落丁のため付録の「年代畧記」も三三六ウ建曆までしか無い。本書はおそらく、刊記だけ萬延版のものを付したもので、本体は文政十年版と見てよいであろう。

## （J） 明治五年版

扉題

（B）文化八年版の個所で既にふれたが、様式は諸本と同じで、目録した一本は「大全早／引節用／集」という題の末に「文化辛／未監定」とある。扉とそれに続く凡例の刷りは良く、本文と同程度である。それゆえ、ここは

文化八年版のそれを流用したのではなく、同年版用のものに基き履刻したものかと思われる。凡例 C本に同じ。前見返し(イロハ丁付合文)十(凡例)二十(本文)三三十一(付録)七十(広告・奥付)一・五丁。I本と同じ様に、三三五ウ以下の「年代畧記」が三三八ウまで続いている。そのため新たに「三百三十九」の丁付のある丁を作つて、オモチに辞書七点の広告を入れ、ウラから刊記を刻している。

刊記 万延版と同形式で、はじめに「天明八<sup>戊</sup>申<sup>申</sup>歲春原則」→「萬延元<sup>庚</sup>申<sup>申</sup>歲十二刺」までの版刻の記事を載せ、次に

明治五<sup>壬</sup>申<sup>申</sup>歲十三刺

と記し、界線を置いて左に

大阪堺筋博労町 和田治郎兵衛

## 版元

同 堺筋大宝寺町 豊田宇左エ門

の二名を掲げる。すなわち、I本から木屋伊兵衛が抜けたかたちである。続いて後見返しに

東京日本橋通一丁目 北島茂兵衛

同 二丁目 稲田 佐兵衛

同 芝神明前 佐久間嘉 七

## 發

京都三条通升屋町 出雲寺文次郎



明治5年版・刊記（部分）

備考

と十名の書肆を並べる。うち北畠は須原屋のことであり、稲田は山城屋、佐久間は岡田屋、藤井は菱屋、前川源七と石田は河内屋、前川善兵衛は伊丹屋、梅村と松村は敦賀屋のことであるから、結局この十名は皆（I）万延版と同じということになる。（なお梅村彦七の住所のみ万延版と異なっている。）

本文はC、D、G本等に近い面を持つが、独自異文もある。（はじめが諸本、後が本書）

行 書 行

同	御幸町御池下ル
藤	井孫兵衛
大坂心齋橋通北久宝寺町	前川源七
同	安土町
石田	和助
同	南久宝寺町
前川	善兵衛
同	安堂寺町
梅村	彦七
同心齋橋通南一丁目	松村九兵衛

四一七九オ・2 無見（見）——胸襟（胸襟）。同・3 烏羽玉（烏羽玉） 夜——叢（叢）

物一にあらざるも、又草木のし交る也 三一九七オ・3 君子（君子）——公人（公人）。

等がそれである。はじめの例は、む―四の箇所であるから本書の方が正しい。次も「む」の四であるから「うばたま」とあるのはおかしい。「むばたま」と表記しないまま諸本皆その誤りを踏襲していたのを、本書で初めて「叢」という項目と入れ替え、正したのである。また「君子」——「公人」も、「君子」は一九五ウ七行目に既出の項目であるから、重出ということで本書の方で訂正したのである。こうして見ると、本書の本文の方がすべて訂正・修正されたものになっているようであるが、例えば、三三二六ウ一行目の「質朴」と三二七ウ一行目の「質朴」との重出はそのまま見過しているし、諸本間で異なる目立つ七五オ・7の「廳庭」も、左に「延」と出し、二四〇ウ・2「惆」の左脇も、補刻風に直した箇所で、何故か「シ」の字がひっくり返った状態にはめ込まれている、といった具合で、必ずしも本書の本文がすぐれているとは言いがたいのである。要するに気のついた箇所だけを訂正したということであろう。なお版下のせいか、見出し字の字体が太い丁とそうでない丁とがまじっているのも特色である。

広告は「數引節用集（三ツ切）」——「大増補（音訓附）大全早引節用集」までの七点であり、末に

右何も薄葉摺、美濃摺等出来有之、御手寄書林ニ而御求可被下ル

と記す。掲出順は異なっているが、万延版にあった「早引大節用集（大本）」の代わりに「懷寶早引節用集（三ツ切）」が入っているだけで、他は同じである。そのうち「數引節用集」は、明治三（一八七〇）年に、豊田屋卯左エ門、

木屋伊兵衛、象牙屋治良兵衛の三名を版元として再刻本が出ており、「大増補 大全早引節用集」も、元治元（一八六四）年に同じ版元から再版本が出ているので、そのあたりをさして宣伝しているのであろう。

（K） 明治十三年版

表紙 黒色地紙に渋塗り。雷紋・唐草空押し。堅一二・一、横一八・二櫃。

題簽 表紙左肩、飾り枠付短冊形黄紙。様式はA以下の諸本に似る。山下重政 編纂 大全早引節用集真字附。

扉 大全早／引節用／集萬延庚申監定。I本に基き新刻か。

丁数 明治五年版に同じ。「年代畧記」が三三八ウ二行目まで来ており、次に「版權免許早引類發兌目錄」と題し次丁オモテにかけて

漢語 掌中節用、は引 數引節用集、同銅版、漢語 數引節用集、真字 新增早引節用集、増補 増字早引節用集、増補 漢語大全早引節用集、同立本銅版、漢語 節用集大成、早引 萬寶節用集、新增 補萬代早引節用集、大増補 音訓附 大全早引節用集、新選 大増補早引節用集

の計十三点の広告を出し、末に

右何れも發賣仕間、最寄書肆ニ而御求可被下候

と留める。そして次の三三九ウから刊記が始まる。広告のうち、「漢語 數引節用集」は明治十一年七月の三刻で、出版人は豊田宇左エ門と和田治郎兵衛。「漢語 大増補早引節用集」は明治十二年一月の版權免許、同十四年三月の刊。



出版人は豊田。増補人はともに小西長一郎。

刊記 はじめに「天明八年原刻／寛政八年二刻／文化二年三刻」→「明治五年十三刻」までを小さく列記し、続いて

同 八年十一月十七日版權免許

同十二年十月十三日再版御届

同十三年十二月十四日出版

堺縣平民故人

編輯者 山下重政

出版人 大阪府平民

豊田字左衛門  
南區長堀橋筋／上壹丁目六番地

と記す。国会図書館蔵本は「十四刻出版」の下に、「定價金五十五錢」の朱印を捺す。続いて後見返し貼付の奥付に

東京日本橋通一丁目／同二丁目  
北畠茂兵衛 稲田佐兵衛 同芝神明前 同久問嘉七 京都三条通升屋町 同御幸町御池下ル  
藤井孫兵衛

大阪心齋橋筋北久太郎町 同北久宝寺町 同南久宝寺町 同心齋橋筋南一丁目 同大宝寺町  
辻本信太郎 前川源七 前川善兵衛 松村九兵衛 大野木市兵衛

の三都十名の「發行書肆」を記す。うち辻本と大野木をのぞく八名は明治五年版と同じである。

備考 本文は万延版に基く新刻か。

### 三、「大全早字引節用集」

さて、以上「大全早引節用集」の諸本について縷述して来たが、早引節用集の中には、本書を改題・改編して成ったようなものが幾つかある。その代表格が「大全早字引節用集」である。「大全早字引節用集」を名乗るものは何点かあるが、そのうち、今回取り上げた「大全早引節用集」と直接かかわって来るのは、次にあげる諸本である。

- イ、五書肆・亀屋半兵衛版　　ロ、同後印本　　ハ、文久三年版　　ニ、播磨屋利助版　　ホ、安政六年版  
ヘ、明治三年版

以下その書型と内容について順次紹介して行くことにする。

#### (イ) 五書肆・亀屋半兵衛版

横本　二ツ切　一冊。薄葉刷もあり。

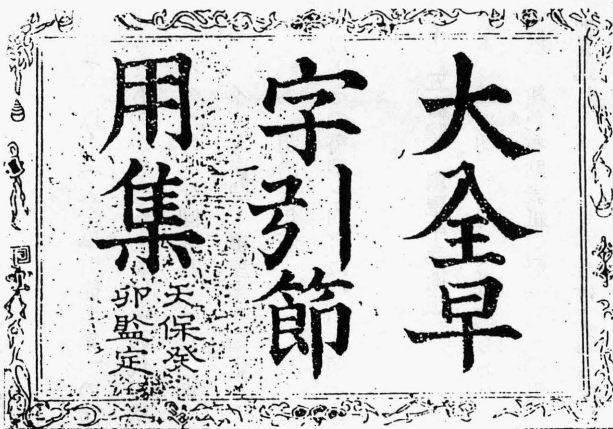
表紙　紺色布貼表紙。 竪一三・〇五、横一九・二糎。

前見返し　所謂イロハ分け丁付合文。様式は「大全早引節用集」の諸本に同じ。

扉題　様式は「大全早引節用集」と同じ。「大全早／字引節／用集天保癸卯監定」。天保癸卯は天保十四（一八四三）年である。

凡例　一ウは「大全早引節用集」のそれを簡略化したかたちになっている。すなわち

凡例



今世二字引種々有トイヘトモ、或ハ乾坤・草木亦ハ門部ニ就  
 索 閱 一、甚遅ナリ、今亦此大全ハ、  
 音訓ノ儘ナルヲ撰テ、假名カズヲモツテ引出ス、其便ナル一此書  
 ヨリ正レタルハナシ

二、播磨屋版・扉

音訓ノ儘ナルヲ撰テ、假名カズヲモツテ引出ス、其便ナル一此書  
 ヨリ正レタルハナシ

とある。右に見るように振り仮名に誤刻が多い。二オウウにかけての「文字引様」は「大全早引節用集」と同例、同文である。但し清濁表記に異なりがある。また「附録」として九種の目録が載っているが、実際には七種しか無い、すなわち「借入金證文書様」―「奉公人一札之書やう」までがあつて、「関所券書やう」「店賣状之書やう」の二つが無い。内容も「大全早引節用集」と異なつて諸証文の雛形のみである。なお、刊記のところに、「大全早引節用集」では付録扱いになつていた十千十二支が入っている。

内題 大全早字引節用集。

版心 白口。凡例部分は下方に序一、序二とあるのみ、本文部分は上方左側に

小さくイロハ分け、界線を置いて下方に丁付。但し一〜十丁目まではイロハ分け無し。付録の個所は下方に二重線を置いて丁付がある。

丁付 (凡例) 序一、序二 (本文) 一〜三百三十一 (付録) 一〜五。 丁

数 前見返し+(凡例)二十(本文)三三十一(付録)五丁十奥付。 行数 有界七行。  
 後見返し飾り枠内。右方に上下二段に分けて「十干」「十二支」があり、二重の界線を置いて左に

諸 加州金澤  
 近岡屋太兵衛

國 彦根白壁町  
 吉野屋太兵衛

賣 越前福井  
 帶屋喜兵衛

弘 同 鯖江  
 屋嘉兵衛

書 油 見  
 龜屋半兵衛板

肆 伏 見  
 龜屋半兵衛板

備考 本書の本文は「大全早引節用集」のそれを略そのまま取っている。但し図版に見るように「大全早引節用集」に

は「増字」部分があるが、本書では十五ウ五行目の「いノ五」まで増字の表示が無い。これはおそらく、本書を新しい著作に見せかけるための細工であると思われる。そのためか七オ四行目までの字詰、行移りに異同が目立っている。

本文系統は

四一三オ・7 忠節いさをし 三四〇ウ・7 阿膠にかハ 四六二オ・7 豊臣とよとミ 三七〇ウ・2 地乱離ちららリへ地乱離チラリ・五七  
 五オ・7 廳宣ちやうせんノフ・廳庭ちやうていニハ・七七オ・7 張本人ちやうほんにん 七七ウ・1〜2 長公主ちやうこうしゆ天子姉妹 貞享曆ちやうけうれき  
 六八一オ・5〜6 琉球国りうきうこく 六一二四オ・2 賽かへりまほせ(マ) 同七・3 上弦かミのゆミはり 四一五七オ・4 哨つばくち

四二四三才・516 詭戯<sup>＊きやくごころ</sup>。 同二四四ウ・3 庭中<sup>＊ていぢゆう</sup>・  
四二六〇ウ・3 才翰<sup>＊さいかん</sup>〈翰<sup>フミ</sup>〉。

等の項目の特徴から、天保三、七年版系、その中でも殊に\*印を付した項の特徴によって、「大全早引節用集」の天保七年版に基いていることが判る。すなわち、扉によれば天保十四年版に拠っているかのようにも思えるのであるが、実際には天保七年版によっているのである。

(口) 同後印本

扉・凡例・内題等 イ本に同じ。

刊記 イ本と同じだが、書肆の二番目「吉防屋」とあった「防」の字が「阪」に、「衛」の字が「衛」になっている。備考 刷り劣る。イ本にあった付録部分が無い。

(ハ) 文久三年版

表紙 濃縹色地紙に雷紋・唐草模様空押し。 竪二・五、横一八糎。

題簽 表紙左肩、短冊形白紙。「大全早引節用集」の諸本に見られるものと同様式。「大全早字引節用集<sup>眞字附</sup>」。 竪一〇・

一、横三・二糎。

前見返し・凡例 イ、ロ本と誤刻部分を含めて同じ。この部分或はイ、ロ本と同一版木を使用か。

扉 イ、ロ本と同じく「大全早／字引節／用集」と三行に分けて大きく題名を記し、末に「天保癸卯<sup>卯</sup>監定」と出す。

内題 大全早字引節用集」。大全早字引の諸本に比べ、字が小ぶりで、行分けの界線との間が空いている。

版心 イ、ロ本と似るが、イロハ分け表示が版心左（ウ）側上部に本文第一丁から記されており、一十までは丁付の上の界線が重線。 丁付 イ、ロ本に同じ。

刊記 イ、ロ本と同様式。後見返し宝珠等の飾り枠内に、右方に「十干」<sup>じっかん</sup>「十二支」<sup>じゅうにし</sup>を上下二段に記し、二重の界線を置いて左に

天保十四 <sup>癸卯</sup> 歳新刺

文久三 <sup>癸亥</sup> 歳再刺

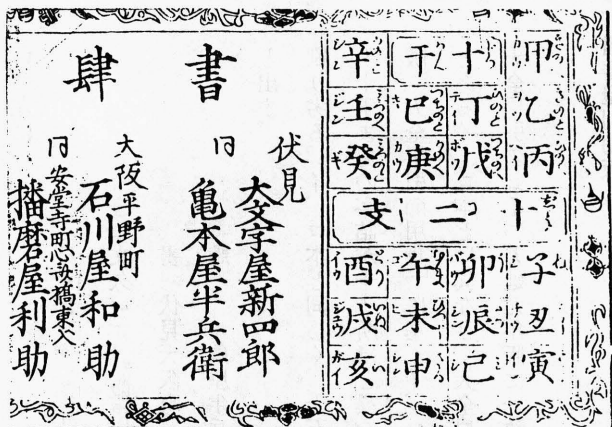
書 伏見大阪町

肆 亀屋半兵衛

と出す。

備考 刷り劣る。イ、ロ本と同じく、十五ウ五行目<sup>五</sup>の増字まで「増字」の表示が無い。但しイ、ロ本とは異版で、第一丁十丁までの字詰が十ヶ所ほど異なるほか、字句に小異がある。例えば三七〇ウ・二 「地乱離」<sup>ちらんり</sup>等は、天保七年版「大全早引節用集」に基くイ、ロ本と同じだが、四二六〇ウ・三の「さいかん」は「才幹」とあって、「才翰」とあるイ、ロ本とは異なり、大全早引の諸本と同じだし、四一五七オ・四 「哨」<sup>つげく</sup>の項も「綿」<sup>つな</sup>〈綿〉<sup>メシ</sup>とあって、大全早引の（一）万延元年版に一致するといった具合である。付録はイに同じ。

## （二）播磨屋利助版



二、播磨屋版・刊記

題簽 八本と同様式。扉 イハ本と同様式。

凡例 イハと同じだが振り仮名等に少異あり。或ハ、就、閱、撰テの

四個所は正しく直っているが、「假名カズヲモツテ」とあるべき

ところを「假名カズヲモツテ」と間違えてしまっている。付録は

イと同じで、目録では九種、実際は七種。

版心 「大全早引節用集」と同様式。丁付 イでは一五とあつた付

録部分のそれが、本書では三百三十二〜三百三十六と、「大全早

引節用集」の形式に戻っている。丁数 イ本に同じ。

刊記 イと同様式。すなわち右方に「十干」「十二支」があり、二重罫

を置いて左に

書 伏見 大文字屋 新四郎

同 龜本屋 半兵衛

肆 大阪平野町 石川屋 和助

同安堂寺町心斎橋東へ入 播磨屋 利助

と四名の書肆を出す。

備考 薄葉刷り本もある。イハ本とちがい、い・1から「増字」部分を立てる「大全早引節用集」の形式を採っている。而してその拠り所とした底本は、イ本と異なり天保七年版系統ではなく、扉にあるように、天保十四年版であるらしい。但し本書独自の誤刻等がある。

### (ホ) 安政六年版

表紙 黒色地紙に雷紋・唐草模様空押し。 縦二二・二、横一八・六糎。

題籤 表紙左肩、子持ち梓付短冊形白紙。「増補 一 大全早字引節用集 全」。 縦一〇・一八、横三・六八糎。

前見返し イロハ分け丁付合文。「大全早引節用集」やイハ本と同様式。 扉 ナシ。

序題 早字引節用集叙「己未〔安政六年〕季夏 積翠陳人誌（印）。これは本書に新たに付されたもの。以下本文の前まで新刻の丁が四丁分続く。すなわち一ウ・二オが士農工商の図、二ウ・三ウが凡例と「文字引様」、四オ・ウが「奥書總目録」である。

凡例 「大全早引節用集」やイハの「大全早字引節用集」と異なつて、新たに作成したもの。

目録 奥書總目録。「諸證文手形案文」→「銭相場早見」までの五八種の付録の目録。末に「以上目録終」とあり。

内題 増補 一 大全早字引節用集。

版心 白口。本文部分は「大全早引節用集」の（H3）嘉永新刻本に同じ。

丁付 （前付）口ノ一ノ口ノ四、（本文）壹、二ノ三百三十一、（付録）一ノ八十一。 丁数 前見返し十（前付）四十（本



文) 三三一十(付録) 八一十奥付。

匡郭 前見返しや付録のうちの「偏冠へんかん構字かまじ盡じ」「男女名頭なんによながしら相性あひせう文字もんじ」「年代署記」、それに奥付は、七宝・宝珠等の飾り

梓。序、凡例、目録は、紅葉に流水模様りゅうすいもようの飾り梓。他は四周単辺。本文行数 有界七行、他は不同。

刊記 後見返し飾り梓内に

天保十四年癸卯晚夏新刻

嘉永七年 甲寅晚秋求板

安政六年 己未初夏再刻

伏見

大文字屋新四郎

### 書

同

龜本屋 半兵衛

大坂

石川屋 和助

### 肆

同

播磨屋 利助

江戸本石町十軒店角

椀屋 伊兵衛板

とある。すなわち二本の二都四書肆に江戸の椀屋伊兵衛が入って板元となっている。

備考

本書は、本文の特色や版心、刊記の刊年部分の記載から判るように、「大全早引節用集」の嘉永七年版、それもH3新刻本の、安政六(一八五九)年求板・改編本である。H3本の版木をそのまま流用し、序や土農工商の図を

付し、凡例を新たに書き直し、九種類であつた付録を五十八種類と大きく増補したものである。や、長くなるが序と凡例を次に掲出して置く。

### 早字引節用集叙

夫文字ノ用タルヤ。千里ノ遠キモ一書ニシテ。面前ニ演ルガゴトク。千載ノ舊キモノ二録シテ。以テ事實ヲ目前ニ知ラシメ。契約ノ券状ハ。文字ヲ以テ信義ヲ明ス。ソノ徳ノ偉ナルコト。實ニ日月ニ亞モノナラシ。然レドモ、初学ノ徒ハ。悉ク識コトアタハズ。故ニ便利ナラシメント。種々ノ早引節用ノ類、汗牛充棟ノ多カルモ。年舊テ朽滅シ。或ハ杜撰踈漏ナルアリテ。遺憾ナキコト能ハズト云。因テ今回校訂ヲ加ヘ。間亦不足ノ文字ヲ補ヒ。梓ニ鐫テ、童蒙ニ。便ナラント欲スルノミ。然レ浅学固陋ニシテ。洩タルモ猶少ナカラジ。俟ノ博識、幸ヒニ。訂シ玉ハン事ヲ請。己未季夏 積翠陳人誌(印)

### 凡例

○此書、元來雅俗を混すといへども、多く俗事を以て要とす、故に民家日用の言語を探りて聚むるのミ、こゝに於て、動ずれば、俗字の謬ありといへども、常に用ひ來れるをバ、その俣に挙たることあり、敢て大方博覧の君子に備ふべきならねバ也

○文字音訓の假字遣も、多く差たるをそのまゝに挙ぐ、却てこれを訂すときはハ、俗間引用に煩ハしく、勞

さん事を恐れてなり、看官幸ひに咎むることなかれ

○此書、常用の文字を挙て、雅文迂遠の字を省きしハ、楮数限りあれば也、他日大成の一書を著し闕たるを補はん

◎世間大方の節用集、乾坤の門部を頒ち、これに属て引求むるあり、然れ共、初学に便ならず、故に、此書ハ、引用ひと欲する文字の音訓の数を以て聚めたれば、或ハ屋宅の家と器物の室と混じたるハ、引用する人、其心を為べき也、又字音の頭字の差ひも、あるハ両様を見べし、一方を見て、その文字なしと弃ることあるべからず

文字引様

一伊・井・猪・同・位・蘭 一聲の分ハこ、にて求む 二市・去来・意味 二聲の分ハこ、にて求む 三幾等・致・凌乱 三聲の分ハこ、にて求む 四陰陽・徒・一人 四聲の分ハこ、にて求む 五膽駒山・勇・著明 五聲の分ハこ、にて求む

餘ハ准へて知るべし、但字音の頭字、まがひ安きもの多し、其二二を左に記す

光明 観音 老人 宝 獵師

斯のごとき類多端なり、これハ両方を尋ぬべし

(ハ) 明治三年版

表紙 縹色地紙に薄く渋引き、雷紋・唐草模様空押し。

題簽・序・凡例・内題等 安政六年版に基き復刻。

前見返し 水色地紙にイロハ丁付合文。改刻。

刊記 後見返し飾り枠内

天保十四年癸卯晚夏新刺

嘉永七年甲寅晚秣求板

安政六年己未初夏再刺

明治三年庚午初春再板

伏見 大文字屋新四郎

大阪 石川屋 和助

同 播磨屋 利助

東京府十軒店 梶屋 伊兵衛

肆

すなわち安政六年版から伏見の亀本屋が抜けたかたちになっている。明治三年云々の「三年庚午初春」の個所は、墨色濃く字体も他と異なる。入木したものとと思われる。また四名の書肆の最後、梶屋の左側に、字配りから見て、一名分程入る空キがある。

備考

本文は（ホ）安政六年版に基き復刻したものであるが、版心等を含め少異がある。例えば、版心のイロハ分け表示。一二七〜八丁は、安政版では表示がないが、本書では各丁才側に「よ」の表示が入っている。また本文では、（はじめが安政版、後が本書）

三四ウ・1 へ類例留連 へ例連 1 2 へ縷紅 へ紅 二三〇五オ・3 灘

水ノ地——灘 等の相違が間々ある。

付録は安政六年版の版木を流用していて、刷りが悪い。巻頭の付録の目録の最後には「ぜにさうばはやミ銭相場早見」があるが、

増二體節用集・巻頭

管見に入った明治三年版には無い。削除したものか、それとも脱落か、未詳である。

増二體節用集

補四 伊意己威 伍友 夫  
 松物膽の膽 浦麦胃心 絹易粉  
 異村辰井底の衣 遠 忌  
 最息持禁名 遠云言 謂 作  
 出入居煎 熱 鐸 集 射  
 出 入 居 煎 熱 鐸 集 射

四、「補増二體節用集」二真草帝國いろは字引大全

以上紹介した「大全早字引節用集」の他にまだ、「大全早引節用集」と関係が深いものがある。「補増二體節用集」と「二真草帝國いろは字引大全」である。まず増補二體節用の方から紹介する。

(ト一) 補増二體節用集

横本 二ツ切 一冊 (薄葉刷り)  
 表紙 砥粉色地紙。 竪一・二・三、横一・八・四糎。 扉 子持ち枠付。 右  
 に「増補早／引二體／節用集」と大きく書名を出し、左に「天保壬  
 寅新刻／金花堂」と記す。 すなわち天保十三(一八四二)年の金花  
 堂須原屋佐助版である。扉ウはイロハ分け丁付合文になっている。

内題 増二體節用集」。

刊記 後見返し、子持ち枠内 上方に「東都書肆」と右から左にかけて記し、その下に、岡田屋嘉七、西宮弥兵衛、小林新兵衛、山城屋佐兵衛、英大助、丁子屋平兵衛、須原屋茂兵衛、須原屋伊八、須原屋源助、須原屋佐助の十名の書肆名を列記する。

備考 国会図書館亀田文庫蔵。扉の次の丁に「文字引様」あり。また巻頭に「分毫字様凡二百四十八字」を、十一行二段で三丁分出す。付録は「大日本國郡田數附」八丁分のみ存。刷り良し。

(ト2) 同後印本

表紙 縹色地紙に雷紋・唐草模様空押し。扉 ナシ。前見返し イロハ分け丁付合文。内題 増二體節用集」。

版心 「大全早字引節用集」イ、ロ本と同じく、一〜十はイロハ分け表示なし。

丁付 (序)、一〜三百三十二、一〜八。丁数 前見返し十(文字引様)一十(本文)三三十一(付録)九十奥付。ト

1本にあった「分毫字様」が無い。

匡郭 前見返しと文字引様、第三三二丁、奥付は子持ち枠、他は四周単辺。有界七行。

刊記 後見返し子持ち枠内右方に「十千の凶并異名」「十二支の凶并異名」を上下二段に分けて出し、界線を置いて左に「書物 日本橋通四丁目 雁皮紙 金花堂佐助蔵」と記す。即ちト1本と同じく須原屋佐助の版である。

備考 「大全早字引節用集」のイ〜八本、二體節用のト1本と同じく、い・四までは増字部分が無く、い・五から増字



表紙 黒布貼表紙。豎二・七、横一八・二浬。

題簽 表紙左肩、子持ち梓付短冊形白紙。「真艸帝國いろは節用大全」。

前見返し 紅紙に「真草兩體／帝國／いろは／節用／大全」と書名を大きく記す。

題字 赤刷り。「壬辰秋日書 對石山人」。序 赤刷り。「壬辰初秋九月穀旦 據梧散人」。これは明和六（一七六九）

年刊の「増字早引節用集」に付されているものと、字詰まで同じである。但し末に「庚辰（『寶曆十年』）春三月」とあつた年次を「壬辰初秋九月」と改めてある。

凡例 赤刷り。これも「増字早引節用集」のそれと同じである。但し字詰めが異なり少異もある。（はじめが増字百倍早引

節用、後が本書）

依コレニヨツテ之題シテ。早引節用集と云イフ——依コレニヨツテ之題シテ實地活用真草いろは節用集ト云フ 原板ノ早引節用  
——原板ノ早引節用 増益シ——増補シ 日用ノ辨ニソナフ——日ヒ用ノ辨ニソナヘントス

右の凡例で題名が「實地活用真草いろは節用集」となっているのは、本書が明治二十五（一八九二）年九月、瀬山佐吉刊・桜井貢編のそれを、そのまま流用したからである。したがって、前出の序のところにある「壬辰初秋」はやはり明治壬辰の年、即ち二十五年ということになる。

なお本書にはもう一つ序文がある。

古昔ハ文字なく、繩なひにて用もちを辨べんず、今ヤ山間辟地さんかんへきちまで文明ぶんめいに至り、二十世紀にじゅうせいの今日こんにちに最も必用もつとひつようの文字もんじを、  
網羅もうら選抜せんぱつしたる早字引はやじひきなり、國民こくみんとして左右さゆうを欠かくべからざる重寶てうほう好師こうしの玉典ぎよくてんなり





刊記  
後見返しに活版印刷で

大正二年一月十三日印刷／大正二年二月三日發行／

編輯者 據 梧 散 人／印刷者

東京市神田區美土代町二丁目一番地

森口應吉／

發行者

東京市日本橋區橋本町

朝野文三郎／

販賣所 全國各書林

とある。

### 備考

すでに指摘したように、本書は序と凡例を「増字早引節用集」と「實地真草いろは節用集」から取り、「もんじひきやう文字引様」

は「だいぜん大全早引節用集」から借用している。では本文はということになるが、その特徴から、「だいぜん大全早引節用集」の

C、文化十四年版あたりを底本にして、改編したものであると思われる。C本とは仮名遣や左脇の真字の訓に異なりがあるほか、文中にあった「かなちがひにて…に入べき字」の注記を削り、語注も始めの方をのぞき殆ど削

除。その後に新項目を加えている場合もある。例えば

四十悪、じゅうあく 十界、じゅうかい 七賢、しちけん 十善、じゅうぜん 七星、しっせい 六十三佛、ろくじゅうさんぶつ 四箇本寺、しかのほんじ 七高山、しちかうざん

等の名数項目に付されていた注をすべて削つたり、

三鮮答、さんせんた はばさる はばさるといふハこれ也 鮮答、せんた はばさる はばさる 波涛、はたう

のように削つた後に新しい項目を入れたりしている。また

八人勢押寄、人面獸心、九本性不違、豊饒年々、豊公関白

のように新項目を挿入している例もある。いずれにしても、明治期の節用・玉篇類の改編・発兌の様相は、木版・銅版・石版・活版相乱れ、頗る錯綜しており、簡単にはその先後関係を特定できない。本書にも、その周辺に、関連がありそうな明治出来の節用類が見え隠れしているが、紙数の都合もあり省略に従うことにする。

## 五、おわりに

図版に見るように、「大全早引節用集」は、イロハ分け仮名数順の本文の後に「増字」の項目を有するのが基本的な様式である。では何に對する「増字」なのであろうか。既に(A1)文化二年版の備考の個所で、凡例や「文字引様」に關し、それが「百倍早引節用集」から來ていることを指摘したが、本文の方も、同じ二ツ切横本の「百倍早引節用集」(庚辰へ「宝曆十年」春三月 據梧散人序。明和六年、實政八年版等諸本多し)のそれを、多少掲出順序を変え、時には表記を変えながら本文とし、それに無い項目を「増字」として追加して行ったものと考えられる。(なお、「増字」の表示の無い個所が、いノ九、いノ十一をはじめとして六十七ヶ所あるが、そのうちの五十ヶ所までは実際には増字となつてゐる)。例えば(前が増字百倍、後が大全早引)

九一 蓮託生、一 攏手半三尺也 樅谷明神山 出雲路幸神城——一遍上人祖也 卒河都代開化帝 池心都  
大和才五代 一 蓮託生、一 攏手半三尺なり 樅谷明神城 出雲路幸神山城 一路・露・魯國 爐・爐舟 櫓・櫓舟 瘻——路  
孝照帝

庭都	庭都	鑑	獲	羊	羊	櫻	櫻
テ	テ	カ	カ	ヨ	ヨ	エ	エ
ト	ト	リ	リ	ホ	ホ	ト	ト
都	都	翠	翠	步	步	東	東
御	御	筭	筭	百	百	來	來
宇	宇	八	八	萬	萬	西	西
比	比	廣	廣	遍	遍	來	來
賣	賣	高	高	蛭	蛭	來	來
語	語	都	都	兒	兒	飛	飛
曾	曾	天	天	命	命	行	行
社	社	皇	皇	命	命	自	自
社	社	廣	廣	八	八	在	在
				緋	緋		
				威	威		

瘿同マデ同、盧同・盧同・呂同・侶同・漏同。

臚同冠同 芦同

といった具合である。また「大全早引節用集」では

- ろ かなちがひにて 蠟燭・老人・浪人
- 四 ⑤に入べき字
- 五 ⑥にかなちがひにて 到着・當歳子。

等として、凡例に言うところの「音かなづかひの取ちがひやすき字」について、二十五ヶ所に互り本文中で注意を喚起しているが、実はこれも「増字早引節用集」を踏襲しているものである。

以上要するに、項目等に若干の異同はあるものの、「大全早引節用集」は「増字百倍早引節用集」の大増補改訂版であるということになろう。が、しかし、本書の方がすべて正しくなっているわけではない。例えば、図版に出した部分を御覧いただくとわかるが、ひノ八のところ、増字百倍早引節用が二項目だけであったのを、大全早引で三項目分追加しているのであるが、その部分「増字」の表示をすべきところを、少くとも（A）文化二年版で「ひ」としてしまい、以後ずっとその誤りを踏襲し、「増字」と正しく直るのは（I）万延元年版になってからのことなのである。その他仮名違いでなく重出している項目もそのままにしてあったりする。今日から見ればやゝ杜撰、と言って悪ければ慎重さを少々欠く編纂・開板ぶりであるが、それが当時陸続と出版されていた節用集類の普通の姿だったのである。